

# 当事者と距離が近い方の「実は〇〇なのです…」

インタビューをした際、障がい当事者でもあり市民活動イベントを何度も主催している方や、障がいをもつ方と深い信頼関係にある支援者の方にもお話をお伺いすることができました。次はそういった方々の目線もご紹介します。

## 障がい当事者 × 主催者

- 誰もが来られるイベント、というのが大前提。障害があっても無くても参加できるイベントをつくるうえで、最初から障がいがある方もない方も来るだろう、と思って企画している。
- 会場選びとしてチェックするのは、駐車場、エレベーター、多目的トイレがあるかどうか。
- 初めて使う会場は下見に行くようにしている。
- 広報はチラシと Facebook 中心で実施。この人に投げたら他の人にも転送してくれるだろうという人を見つけて広報する。
- できるだけ参加のハードルを下げる。どうやってきっかけを与えてあげられるか。やりたいことをやっていたら、誰でもどんどん前向きになってくる。
- 最初から「できない」と思わない。「やってみたい」と思える場づくりが大切。
- お互いのやさしさや励ましの言葉や対応の相乗効果で気分が上がる！
- イベント主催者と参加者。お互いが気を遣いすぎて疲れないようにしたい。

## 支援者 × 主催者

- そもそも、社会に対して何らかのバリアを持つ方を「障がい者」として扱っていない。その人の個性としてとらえているので、バリアを持つ方に対して特別に配慮をしたイベントをすることはなく、やりたいことをやっている。
- 参加したいと言ってくれる方がいれば、「こういうバリアがありますが大丈夫ですか？」と投げかける。
- 過度な気遣いにならないよう、できる部分は自分自身でやってもらう。
- 直接相手とコミュニケーションを取る時、過度な気遣いを避ける為、情報を提供する時に3つ以上は言わない。(縦の移動手段 (EV) があるかないか、多目的トイレの有無、段差の有無、など)
- 障がいを持つ方とコミュニケーションを取る時、ただその人が旅行に行った話などを聞くことが多い。その話を通して、その人となり、そして障がいをもつ人が日常でどう過ごすのか、どうハードルを越えているのかを教えてください。

**さいごに** ここで紹介したすべてのことを実行しないと良いイベントができないわけではありません。特性によってなにがバリアになるかはケースバイケースです。ご紹介したすべての取り組みを実行しようとしても、「誰かのバリアを防ぐもの」が「誰かのバリア」になることもあります。大事なのは、障がいの有無に限らず、「その参加者自身の目線」を想像できること。この冊子でその想像力が少しだけでも育まれたのではないのでしょうか。参加者ひとりひとりと向き合い、ぜひステキなイベントをつくってくださいね！

